

二〇二五年・京大国語 理系・第三問「問題編」

こんにちは。今回は二〇二五年京大国語、理系・第三問(古文)にチャレンジしてみましよう(文系の問題は以前に解説しています)。京大の古文に多い近世の出典、しかも二〇二四年から連続して本居宣長の文章でした。文意は明確で難しい単語などもなく、京大の古文としてはかなり易しい問題でしたが、その分だけ正確な知識に基づいた訳や記述が必要だったと言えるでしょう。

次の文は、本居宣長『玉勝間』の一節である。これを読んで、後の問に答えよ。(三〇点)

仮^{かな}字づかひは、近^きき世明らかなりて、古^{いにしへ}まなびするかぎりの人は、心^{こころ}すめれば、をさをさ誤ることなきを、宣長が弟子^{をし}どもの、つねに歌書きつらねて見するを見るに、誤りのみ多かるは、又いかにぞや。抑^{おさ}もてにをはのととのへなどは、うひまなびの力及ばぬふしあるものなれば、誤るも罪ゆるさるるを、仮字づかひは、今は『正^{しやうぜんせう}濫抄』^{*}もしくは『古言梯』^{こげんてい}などをだに見ば、むげに物知らぬわらはべも、いとよくわきまふべきわざなるを、猶^{なほ}とりはづして書きひがむるは、か^②へすがへすいかにぞや。これはた心とどめず、又ひたぶるにまなび親にすがりて、「たがへらむは直さるべし」と思ひおこたりて、おのが力いれざるからのわざにしあれば、かつは憎くさへぞおぼゆる。しか人にのみすがりたらんには、つひに仮字づかひをば、知る世なくてぞやみぬべかりける。されば「い・ゐ」「え・ゑ」「お・を」、又「はひふへほ」「わゐうゑを」、又「しちすつ」^{*}の濁音^{にじりごゑ}など、いささかもうたがはしくおぼえむ仮字は、わづらはしくとも、それしるせるふみを、書かむたびごとにひらき見て、たしかにうかべずは、やむべきにあらず。何^③わざま、おのが力をいれずては、しうるることかたかんべきわざぞ。人の子の、年たくるまで親の手はなるること知らざらむは、いといと言ふかひなからじやは。

(本居宣長『玉勝間』より)

注(*)

近き世明らかなりて＝江戸時代、歴史的仮名遣いの規則が打ち立てられて研究が進んだ。てにをはのととのへ＝助詞などの使い方。

『正濫抄』もしくは『古言梯』＝どちらも仮名遣いの実例を記した書物。

「しちすつ」の濁音＝「じ・ぢ」「ず・づ」の仮名遣いを指す。

強者の戦略

問一 傍線部(1)を現代語訳せよ。

問二 傍線部(2)について、著者は何を疑問に思っているのか、「てにをはの」とのへ」と対比しつつ説明せよ。

問三 傍線部(3)を現代語訳せよ。

【解答】

問一 注意するようなので、ほとんど間違うことはないのに、

問二 助詞などの使い方は、初学者には難しいものもあるために間違うのも仕方ないが、仮名遣いは、書物を調べさえすれば子どもでも理解できるものであるのに、宣長の弟子たちが和歌を書く際などに間違いが多いのはどういうことか、ということ。

問三 どのようなことも、自分の力を入れて努力しないならば、なし得ることが難しいに違いないことだぞ。

【解説】

問一 「心すめれば、をさをさ誤ることなきを」

現代語訳する問題。方針としては、**文法・単語に忠実に訳しつつ、分かりにくい点があれば言葉を補っていく**。ただし今回はほとんど直訳のみで問題ない。推定の助動詞「めり」、已然形＋接続助詞「ば」、古文単語「をさをさ」、接続助詞「を」はどれも基本的な知識である。末部の接続助詞「を」は文脈を踏まえて逆接で訳す必要があるが、難しくはない。なお、近世の文章では、漢文と同じく「已然形＋ば」で「順接仮定条件」を表すことがあるが、今回はすなおに「順接確定条件」でよい。「心す」は古文単語として暗記しておくというより、「心して聞く」など現代語から推測するとよい。

問二 「かへすがへすいかにぞや」

傍線部説明問題。**直前の3行程度を訳して文章を整える**。注意すべき文法・単語としては、「うひまなび」Ⅱ「初学者」、「だに見ば」Ⅱ「さえ見るならば」（類推の副助詞「だに」＋マ行上一段動詞「見る」未然形＋順接仮定条件の接続助詞「ば」）、「ひがむ」Ⅱ「間違う」など。本文は宣長が弟子たちを非難・叱責している文脈であるので、「宣長の弟子たちが」と明示しておくことは忘れないようにしよう。なお、宣長は書き間違いの原因を本心から疑問に思っているというよりは、本文で直後にある通り、弟子達の不注意や師匠に頼る態度にあると考えているが、設問条件が「何を疑問に思っているのか」とあるため、解答もあくまで「疑問」としてまとめる。

問三 「何れも、おのが力をいれずては、しうる」とかたかんべきわざぞ」

現代語訳する問題。「ては」を仮定条件で訳せれば、後は易しい(文法的説明としては、複数の説明が可能で諸説あるが、受験生としては「仮定条件」が分かれればよい。なお、「ず」は終止形ではなく連用形である)。その他、古文単語「わざ」は「こと」の意味。「しうる」はサ変動詞「為」連用形＋ア行下二段動詞「得」連体形(「強ふ」はハ行なので注意する)。「かたかんべき」はク活用形容詞「難し」連体形の撥音便化＋推量などの助動詞「べし」連体形。

【現代語訳】

仮名遣いは、近い時代に明らかになって、古を学ぶ全ての人は、注意するようなので、ほとんど間違ふことはないのに、宣長の弟子たちが、常に歌を書き連ねて見せるのを見ると、誤りばかり多いのは、またどういふことだろうか。そもそも「てにをは」の整え(助詞などの使い方)などは、初学者の力の及ばないところのあるものだから、誤っても罪は許されるが、仮名遣いは、今は『正濫抄』または『古言梯』などをさえ見るならば、まったく物を知らない子どもでも、とてもよくわきまえられるはずのことであるのに、なお的を外して書き誤るのは、重ね重ねどういふことだろうか。これはまた、気をつけず、またひたすらに学びの親(師匠)にすがって、「間違っている箇所は直してくださいさるはずだ」と思っただけで、自分の力を入れないからのことであるので、一方では憎らしくまでも思われる。そうして人にばかりすがっているようでは、ついには仮名遣いを、知る時もなくして終わってしまうにちがいないことだ。だから「い・ゐ」「え・ゑ」「お・を」、また「はひふへほ」「わゐうゑを」、また「し・ち・す・つ」の濁音など、少しでも疑わしく思われる仮名は、煩わしくとも、それを記した書物を、書こうとするたびごとに開いて見て、確かに思い浮かべ(られ)ないうちは、やめるべきではない。どのようなことも、自分の力を入れて努力しないならば、なし得ることが難しいに違いないことだぞ。人の子が、年を重ねるまで親の手を離れることを知らないようなことは、まったくもって言う甲斐がないではないか。